W.E.グリフィスと松平春嶽　---やさしき名君の面影---　2016.11

W.E.グリフィスが日本の歴史を叙述した著書 *The Mikado's Empire*『皇国』第一部の最終章、明治維新を解説した *The Recent Revolution in Japan* に掲載された挿絵のひとつに、松平春嶽公（慶永）の肖像があります。本人から贈られた写真を元にしたと注記されています。実際、その絵と同じ構図の写真が、ラトガース大学図書館に寄贈されたグリフィスの遺品の中にあります。

福井市立郷土歴史博物館のコレクションの中核となっているのは、春嶽公の子息松平慶民子爵（1882-1948）が大正六年（1917）に創設した春嶽公記念文庫ですが、その中にはグリフィスの代表作である上記『皇国』とともに、文庫創設の二年前に出版された *The Mikado* も収められています。現在岩波文庫で和訳も読めるこの本の第八章は、「松平越前 -将来を見通した改革者-」。その文章は、幕末期の春嶽公が青年藩主として、また幕府の指導者として新しい日本国の建設に苦闘した事績を紹介しつつ、国際社会と海外の学術についていち早く認識したその先見性が、グリフィス自身の日本赴任につながった事にふれています。

実父春嶽公の伝記編纂を念願とした慶民子爵は、記念文庫創設の際、グリフィスにも関係資料の寄贈を希望しました。その際にグリフィスが直ちに執筆して他の資料と共に日本に送った“Echizen Shungaku”という原稿が記念文庫に残されています。その中でグリフィスは春嶽公を「the old prince 自分たち外国人はそう呼んだが」と回顧し、偉大だったと回想しながら、問いかけます。“A Great Man” he was, but what is a “great man”?　そしてシェイクスピアを引用して評します。「ある者は産まれた時から偉大であり、ある者は偉大さに自ら到達し、またある者はそうなる事を強いられる」。そして春嶽公は、この三つ全てにあてはまると。

第一と第二の点は、高貴な地位に生れ落ちた事、及び当時の多くの貴族のように怠惰と遊興に流れる事なく、研鑽を積んで善政をなした事。その治世から半世紀以上を経た今（大正時代）でも春嶽公が越前の庶民から敬愛されているのは、「彼ら庶民のためになした、たゆまぬ献身ゆえ」であり、自分は多くの藩領を見聞して、福井藩の人々が他領に比べていかに幸福で健康な様子だったか、この目で見たのだとグリフィスは述べます。そして第三点として、決して自らの意志・欲望によってではなく、時に徳川将軍家の救世主として、時に帝国の解放者として、ただ国と主君への義務感・忠誠心から国家枢要の地位に引き出された事。グリフィスは春嶽公の「無私無慾」を特質とする名君の肖像を描きながら、困難な時代にあえて国政の最前線に立った改革者への深い敬意を表します。先見の明を持ち、それを表明する事が危険だった時代におそれる事無く自らのヴィジョンを熱心に説いた事に、自分は強い感銘を受けたのだと。

≪春嶽公の好学と謙虚≫

我に才略無く我に奇無し　常に衆言を聴きて宜しき所に従ふ

春嶽公の強さは、人にまなぶ謙虚さにありました。すぐれた家臣を登用し、どんどん意見を言わせる。幕末の福井藩が多くの偉材に恵まれたのも、彼らが活躍の場を与えられたからこそです。

少年時代から書に親しむ好学のプリンスは、福井藩の改革を念願する家臣たちの希望を一身に担って成長しました。日本の国体を重んじる尊王の青年君主は、西洋諸国の侵略に断固立ち向かうべきだと強硬論を唱えながら、その実行には西洋に学ぶ事も必要と正しく認識し、偏狭な排外主義の対極へと向かいました。日本が国際社会に自ら積極的に参加すべきなのだと。そしてついには、西洋は技術においてだけでなく政治においても大いに学ぶべき対象であると気づき、政情が攘夷論で激しく沸騰するさなか、新しい日本の体制には「巴力門（パーラメント)、高門士（コモンズ)」すなわち上下両院の議会政治が必要と主張しました。また下院は「諸藩士の有名の者」で構成、もしくは「百姓町人、又は庶人を加ふるも一法なるべし」というその思想には、厳しい身分差を超越して国力を結集する必要性の認識とともに、庶民を信頼するあたたかいまなざしが感じられます。

春嶽公が第一の寵臣中根雪江に連れられて、福井城下に住む歌人橘曙覧の住まいを不意に訪れた際に抱いた感慨は、当時の常識を外れたその行動以上に、人柄を示して余りあります。「曙覧は外見こそ貧しいが、その心のみやびに自分は到底及ばない。高位の自分は何不自由ない生活をしているが、心は寒く貧しく、赤面する思いだ。これからは曙覧の歌だけでなく、その心のみやびを学んで心の俗塵を洗い月花を友としたい。」

国学を愛し続けた春嶽公ですが、同時に洋学への熱意も高まるばかりでした。下に引くのは越前の歴史家平泉澄（1895-1984）が春嶽公記念文庫名品図録の出版にあたって寄せた序文の一節です。

「又當時洋学といへば、専ら蘭学であつた中に、いち早く英学に着目し、且つ着手せられた事は、公の所藏の中に一册の英蘭辞書があつて、その見返しに、公が文久元年（1861:引用者注）初秋、次の詩を書いて居られるによつて知られる。
　四海一家、情阻てず、常に萬里に遊んで渠を知らむと欲す、英文学ばむとして、
　学ぶに由無し、故に愛す和蘭對譯の書
惜しい哉、此の辞書は、福井の戰災によつて失はれたが、六十年前、之を見た時の感動は、私の記憶に今も猶あざやかである。」

記念文庫に収められた春嶽公の愛用品には、英国製クロノメーター、気圧計、方位測定器、オランダ製水銀寒暖計、フランス製日時計、フランス製磁針、英国製気圧計、ドイツ製望遠鏡および双眼鏡・・と、外国人理化学教師の福井赴任の必然性を物語る器具が数々遺されています。

記念文庫収蔵品の中には、グリフィス来日の年に春嶽公が徳川慶喜から贈られた油絵がありますが、その箱書には春嶽公の自筆で　It is picture, which Sir Keiki Tocugawa sent by picturing himself, at last spring of third year of Meiji.　とあります。春嶽公の英語学習が悠々自適の晩年まで続いた事は日記からも知られます。曙覧を慕う和魂の殿様は、文明開化の申し子でもありました。

≪春嶽公のやさしさ≫

東京明治四年辛未三月十三日　　ウリヤムイーグリフヒス閣下

グリフィスが住んだ時代の福井藩を知事として治めていたのは、春嶽公の隠居後に越後糸魚川松平家から養子に入って相続した巽嶽公（茂昭）でした。知事からグリフィスの福井到着を伝える手紙を受け取ったと喜んでいる東京在住の the old prince から福井のグリフィスへ送られた手紙を、以下原文を交えながら意訳します。
福井の役人が閣下に「親切の待遇をなし」、しっかりした家来をつけて、閣下のための住居も提供すると聞き、ほっとしています。
「福井は東京と違ひ、万事不自由なるを以、大なる不都合あるべし」。時に故郷を思い、日頃親しんだ品も福井では手に入らず、ご心情お察しします。本国に注文した器具が届いたら、福井の生徒への教育に「力をつくし玉はんことを」お願いします。二月二十八日に東京に着いた藩知事も、「閣下の日々勉強して生徒を教導することを喜んで、余に話しあり」。話を聞いて、感謝しています。
東京での社交の話の後、手紙はこう結ばれています。
「閣下本国の御両親に御離れゆへ、日本にて朋友と余を思召のむね、於余も閣下に向かつては朋友の待遇をなすべし。別て時下寒暖不調なるを以、閣下の安全を望む。謹言。」

福井に着任したばかりのグリフィスに宛てた春嶽公の手紙には、故郷を遠く離れ、今日では想像も難しい程文化的にかけはなれた異国へ招かれた若者へのやさしい気遣いが満ちています。松平春嶽という君主を何よりも特徴づけるもの、それは苛烈な時代に、常に苛烈な環境に自らの身を置きながら、決して失われることのなかったやさしさではないでしょうか。革命は多くの血を求め、吸うごとにまた求めるものであり、維新も全く例外ではありませんでした。再び、平泉の前掲序文から引用します。

春嶽公が温和恭謙であり、人生に對する深い理解と愛情とを持つて居られた結果として、越前藩に於いては、殘酷非道の處刑が行はれなかつた。それは當時の雄藩の中に在つて、特異であり、稀有であつた。何分にも狂瀾の世の中であつたから、他藩に於いては、隨分無理な處罰、過酷な死刑が行はれてゐた。（略）然るに越前藩に於いては、かかる殘酷なる處刑の行はれた事なく、ひとり自ら行はないばかりでなく、幕府より刑罰の手傳を命ぜられても、「春嶽の考もあるにより、お斷り申す」と答へて、之を拒否した。

最後に、グリフィスの東京生活時代に、彼が春嶽公から送られた手紙を紹介します。内容は友人の秋月種樹（1833-1904 日向高鍋藩世子で、春嶽が政府の閣僚だった時期の部下）が入手した、越後で発掘された魚の化石を、グリフィスと彼の同僚のシェンクに贈るというものです。実はこの手紙、「石」の字以外全てカタカナで書かれています。滞日中、日本語には随分苦戦したグリフィスも、この頃にはカタカナを読みこなすまでにはなっていて、そうしたのでしょうか。文章のたどたどしさがかえって差出人の細やかな情愛を感じさせます。ご案内の文章も今更ながら読みやすさを優先して、手紙が全文カタカナの所あえて全文平仮名で表記致しましたが、余計な御世話だったでしょうか。

わたくしの、したしき、ともだち、なる、あきづき、の、きみ、さきだって、ゑちごに、あすびしが、そのせつ、わたど、と、いへる、ところ、にて、やまの、なかより、ほりいだせし、まへの、せかい、なる、うおの、かたありし、いし、を、あまた、ゑたり、われに、ひとつ、を、おくられし、を、きみ、たちに、みせて、かんがへを、ねがふ、きみたち、このめずらしき、石を、ほりするよしをきくからに、あきづきに、このことを、はなせし、あきづき、よろこびてをゝく、もちかへり、たれば、みすとる、ぐりふひす、とみすとる、しえんく、とにおくるべし、さくじつかの石、を、われにまで、まわされたり、よって、きみ、にまで、いし、ふたつ、を、おくる、ひとつ、しえんく、くん、に、わかちたまふを、ねがふ
あなかしこ

めいじ、だい、ろくねん
くがつ、じうさん、にち

まつだいらよしなが　花押

ういりやむい一ぐりふひす、の、きみ

注：「しえんく」はドイツの鉱山技師で、開成学校で鉱山学を教えたシェンク Karl Schenck と思われます。小浜藩出身で、わが国の地質調査の基礎を築いた和田維四郎（1856～1920）も彼の生徒でした。

W.E.グリフィスと松平春嶽　関連年表

年表内人物の年齢は満年齢。括弧内数字は春嶽の年齢[＝年号－生年]。

1828　江戸で生まれる。御三卿のひとつ田安家。父齊匡、母青松院、祖父一橋治済。

1838　越前松平家を相続。(10)

　　のち、弟慶臧（よしつぐ）は尾張徳川家を相続、妹筆姫は鍋島閑叟に嫁ぐ。

1843　はじめて越前の土を踏む。この年 W.E.グリフィス生まれる。(15)

1849　肥後熊本細川家の勇（いさ）姫と結婚。勇姫十五歳。(21)

1853　将軍家慶、死去。六十歳。家定が後継。二十九歳。

　　米国の砲艦外交に対し、強硬策を主張。(25)

1857　徳川慶喜の将軍家相続を運動。積極的開国に主張転換。(29)

1858　井伊政権と対立して、隠居・謹慎を命じられる。(30)

　　松平茂昭が後継（元越後糸魚川藩主）。二十二歳。

　　将軍家定、死去。三十四歳。家茂が後継（元紀州藩主）。十二歳。

1859　腹心の橋本景岳、幕府により処刑される。二十五歳。(31)

1860　政敵井伊直弼、暗殺される。四十四歳。(32)

1862　朝廷から大老に推挙され、幕府最高首脳（政治総裁）に就任。(34)

1863　総裁を辞任して越前に帰国、政局打開策をめぐり藩論分裂。(35)

1865　橘曙覧の家を訪問。(37　曙覧 53)

1866　将軍家茂、死去。二十歳。慶喜が後継。二十九歳。(38)

1867　日下部太郎の渡米。二十二歳。徳川慶喜による大政奉還。(39)

1868　王政復古政府の幹部に就任。内戦を避けようと調停するも、開戦。(40)

1869　民部省・大蔵省の長官、大学別当（教育のトップ）など務める。(41)

　　松平茂昭、福井藩士の主君ではなく、福井藩の知事となる [版籍奉還]。

1870　政府の職をすべて辞める。(42)

　　日下部太郎、米国で死去。二十四歳。年末にグリフィス来日。二十七歳。

1871　グリフィス、福井に赴任 [3/4]。(43)

　　廃藩 [8/29]。松平茂昭と旧臣たちの別れ（福井城大広間での式典）[10/1]。

1872　東京に転任したグリフィスと交友。(44)

1874　グリフィス、米国へ帰る。(46)

1876　グリフィスの主著 *The Mikado's Empire*『皇国』出版。(48)

1877　旧臣中根雪江、死去。七十歳。(49)

1882　子息慶民、生まれる（のち子爵家を創設）。(54)

1886　子息生まれる（のち尾張徳川家を継ぎ、侯爵徳川義親となる）。(58)

1887　勇姫が亡くなる。五十三歳。(59)

1889　勲一等旭日大綬章を受ける。(61)

1890　東京で死去（墓所：品川の海晏寺）。六十一歳 [6/2]。

　　侯爵茂昭、死去。五十三歳。康荘（やすたか。妻は春嶽の娘節子）が後継。

1904　日露開戦。翌年、終戦。
1906　慶民、侯爵康荘夫妻の実子による相続を願い、自らの相続解除を願い出て許され、子爵家を創設。
1912　明治天皇、崩御。五十九歳。大正天皇、践祚。三十二歳。
慶民、宮内省へ奉職。この頃、春嶽公の遺品を分与され、保護を託される。
1914　第一次大戦、開戦。
1915　慶民の子息、永芳生まれる。グリフィスの著書 *The Mikado* 出版。
1917　慶民、春嶽公の伝記編纂を決意し、侯爵康荘、侯爵義親の協力を得て、春嶽公記念文庫を創設
1918　第一次大戦、終戦。
1926　大正天皇、崩御。四十七歳。昭和天皇、践祚。二十五歳。
1927　グリフィス夫妻、来日。福井で大歓迎を受ける。
1928　W.E.グリフィス、死去。八十四歳。
1930　慶民、式部次長に就任。侯爵康荘、死去。六十三歳。
1934　慶民、式部長官に就任。
1936　二二六事件。翌年、盧溝橋事件。
1939　松平春嶽全集第一巻発刊（全四巻）
1941　第二次大戦における日米開戦。
1944　永芳、海軍少佐に任官。
1945　慶民、宗秩寮総裁に就任。第二次大戦、終戦。
1946　慶民、宮内大臣に就任（翌年、宮内府初代長官）。
宗秩寮総裁松平康昌（康荘の実子）らと共に、昭和天皇独白録作成。
1948　慶民、依願免職の後、死去。六十六歳。福井大震災。
1950　松平旧侯爵家より福井県立図書館に史料寄託（以後数次）。
1953　永芳、福井市立郷土歴史館創立に際し、記念文庫史料一部を寄託
1954　陸上自衛隊創設。永芳、入隊。
1957　式部官長松平康昌、死去。六十三歳。
1967　松平旧侯爵家より福井市立図書館に史料寄託。
1968　永芳、自衛隊を退官。歴史館館長に就任し、記念文庫史料の大半を館に寄託。
1970　歴史館の史料収蔵庫などが大規模に整備され、歴史博物館に改称。
同年および 1974　永芳、記念文庫を福井市に無償で寄贈。
1976　徳川義親、死去。八十九歳。
1977　松平旧侯爵家より福井市立郷土歴史博物館に史料寄託。
1978　永芳、靖國神社宮司に就任。
1983　財団法人積善会により記念文庫収蔵品の図録刊行。
1989　昭和天皇、崩御。八十七歳。
1992　永芳、再び福井市立郷土歴史博物館館長に就任。
2005　永芳、死去。九十歳。